

戦中・戦後から生き延びて

広島県・広島縫製労連会長・ 島田 数夫

戦争の恐ろしさ

人間は思い出に生きていないのでしょうか、私は60年以上生きています。沢山の思い出を作り、沢山の思い出を忘れていきました。まるで河の流れに浮かぶ泡の如く、作っては消え、また出来る。消える思い出の中に決して忘れられない思い出があります。忘れられない思い出こそ生きる支えになっているようです。思い出が人間の生き方に大きく影響するのではないのでしょうか、戦争の悲惨さの中で苦しくても生きる、耐えることを身につけました。これは学校で習うのではありません。体験なのです。

この事が私の一生の仕事、労働運動の支えになったようです。

昭和16年3月、呉に生まれました。母子ともに危ないと医者にいわれて危険を冒して生まれたと母が言っていました。病弱な子として、この世に誕生したようです。

昭和16年12月8日に日本海軍は真珠湾攻撃をして太平洋戦争が始まった年です。呉湾は海が非常に深く、造船所として適していることで明治以来造船業が発達しました。この年、呉造船所で世界一の戦艦大和が完工しました。昭和16年は歴史に残る年であり、呉という悲劇的な町に生まれました。悲劇をくぐりぬける。

激動の年に生まれ、何度も死の淵を歩きながら助かったのです。幼少の時期に呉四道路のアパートの二階で生活していました。父は徴兵でサイパン島へ、母子3人暮らし。4歳の時の話です、終戦近くなって米軍の航空軍 B29 はマリアナ基地を飛び立って全機166機の半分が呉にやってきました。呉市街、呉工場、広工場を攻撃した、呉湾に浮かぶ軍艦攻撃には艦載機がやってきました。総勢何千機の攻撃を受けた、艦載機2170機、B29、B24、計610機、沖縄に続く二つ目の海戦と言われ、呉攻撃をおこなった、米軍の海兵隊は上陸してこなかったが空爆は真珠湾のカタキと言われ憎悪の満ちた攻撃をくりかえした。呉の軍人、市民の何万人が死んだのです。呉沖海空戦は始めに燃料貯蔵施設を全部破壊して、呉湾及びその周辺に浮かぶ軍艦を艦載機が攻撃、砲撃の玉が飛んで来るのが分かるが船が動かないので逃げられないと兵士の告白、燃料が無く動かぬ日本戦艦を標的にされて攻撃して沢山の海兵が殺され、手足をもがれての戦いで何隻も沈没させられました。合計千人に及ぶ海軍の兵隊が死亡した。日本海軍が真珠湾攻撃したことでアメリカは日本攻撃を決めました。

真珠湾の奇襲はアメリカが日本を攻撃するために正当化した、大儀名文なのです。真珠湾の戦果は戦艦4隻撃沈、4隻撃破、空中戦で撃破、死傷者450名といわれます。これに比べる呉大空襲の被害の方が大きいのです。被害は広島、長崎の原爆を含めると日本全体、アジア全体を計算に入れて見ると何十倍、何百倍のお返しでないか、まるでノミがかんだくらいで命をとるヤンキーの仕返しでした。

私は呉大空襲の時4歳ですが危機が迫ってきた時、幼児でしたが緊迫した夜の数時間を未だに記憶して強烈な夜を憶えています。その頃は夜になると警戒警報が鳴りそのたびに避難したのです、7月1日の夜、警報がなり私は「いつもの事で行かん」と駄々をこねた。母は危険を感じたのか私を無理やりに背負って、妹を抱いて階段を駆け下りて、

呉の町に逃げていきました。あっちこちで火災が起こり暑い夜を逃げて行くと途中で真っ赤な大きな鯉が暗闇に跳ねていました、電気は消えていましたが燃え盛る火の明かりで見えました、この事は今も忘れられない。鯉も戦争を怒っていたようにみえた。

防空壕にたどりつき、中は暑くて水が無いので小便をアルマイトの弁当箱でまわし飲みでした。その時はなんとも思わなかったが今思いますと異常であった。防空壕の中は暑くて、酸素が少なく喉が渇く、子供は特に「水、水」と悲鳴を上げたそうです。私達は満員であり、防空壕を出て次の防空壕にたどり着くが入れない。二河川まで逃げていく、川の水は湯になり熱いのです。一夜にして呉の町は廃墟となり瓦礫の山が出来ました。市を破壊して人間を殺し、家を破壊してしまったのです。何万人が殺される時は人の気持ちなど関係ないのです、戦争の残忍、悲惨、残酷を忘れてはいけません。今は人権だ、個人情報だと言っていますが、戦争はそんなものは関係ない、生きるか死ぬかだ。

昭和20年7月1日の夜から朝にかけて焼イ爆弾を落とした。焼イ爆弾は中に油を入れて落として火災が発生するようにして呉の町を焼き払う作戦でした。日本の住宅は紙と木で出来ているので焼き払う米軍の攻撃でした。呉の住民を全滅させる米軍の冷酷非情な作戦で7月1日の夜に多数の女、子供、年寄りが亡くなりました。私達母子は母の強い意思で爆弾は何千発落とすのにもかかわらず九死に一生をえたのです。軍人も戦死しましたが民間人が多数死亡した呉大空襲は米軍の恐ろしい殺戮でした。沖縄攻撃と同じ目標は呉でした。米機動部隊が呉軍港、広工廠、11空廠、呉空廠など徹底攻撃をした。沖縄について呉は大変な悲劇のあった市です。

人間を虫ケラ同然に殺し、建物を容赦なく破壊する、呉の町は廃墟と化し、そして戦後も食料難で乞食同様の生活を強いられ、呉の町に沢山の戦災孤児がいました。孤児が空きカンをもって夕食の終わる頃家に来ていたのでわずかの食べ残りを母がやっていた。母の話では学校も行かれず、進駐軍の靴磨きなどで生活していた。大きくなってもいい生活は出来なかったようです。彼らは物貰いをしてボロをまとい苦しい生活をして大きくなっても教育もしてないので仕事もつけず殆どは浮浪者として死んでいったのです。野良犬、野良猫同然です。生きても希望も無く行きずりであわれな一生を終える。

戦災孤児は昭和23年の厚生省の調査で全国に123,500名でその殆どは戦争で親を無くした孤児です。広島原爆孤児は6,500名、沖縄は3,500名です。孤児収容施設も不十分で引き取り手の無いまま浮浪児になったり、親戚をたらい回しにされたり仕事にこき使われたり、義務教育も満足に受けられない孤児が多かった。

戦争の悲惨さを体験した、二度と戦争の残酷な殺戮は繰り返してはいけません。今日日米関係は良好といわれますが、先人達の多大な犠牲のうちに成り立っている事を忘れてはいけません。

呉空襲の記録

呉空襲記（中国新聞社昭和51年発行）によると20年7月1日23時50分～2時30分で落とした爆弾は焼イ爆弾80,000発、死者1,800人、重傷1,400人が一夜にして人、家が失われ大きな悲劇にあった。呉市街地の被災は23,000戸、被災者は123,000人が被災にあった。また呉海戦では呉港に停泊していた軍艦の死者は大淀210人、日向197人、伊勢190人、利根128人、桑名66名、北上

32人、葛城13人、出雲3名、計839名その他潜水艦も沈没。

第二次世界大戦で日本将兵は120万人、負傷460万人、市民47万人そしてアジア全体では600万人が死亡したと言われます。一国が全滅するほど沢山の人が犠牲になり、この恨みは消すことが出来ません。死人に口なし、生きている者が戦争の責任を追及しなくてははいけません。この戦争で虫けら同様に死んでいった者は弔いもされないのです、このような犠牲者は真の犠牲者です。国家は壊滅状態で何も出来ない、何もしないのです。

私達親子は運良く助かったのです。後で聞いた話ですが、防空壕に入れてもらえなかった事が助かったのです。防空壕に入った人は酸欠で朝起きたら全員死亡していたとのことです。防空壕のいたるところでこの現象が起こったそうです。

終戦後は広工廠の住宅に住み、食べる者が無く、食料営団に朝早く行列で並んでヌカ団子の蒸したのを二~三個貰って食べなくてははいけない、とても臭くて食べられない、食べないと母が怒るので無理やり食べさせられた。鶏のえさを食べて命をつないだのです。呉の町は進駐軍が我がもの顔でのさばりジープを乗り回していた。日本人の襲撃を恐れてか大抵のジープにはブルドッグが睨んでいました。私はブルドッグが怖かったのを憶えています。

終戦後は沢山の進駐軍がいて、進駐軍相手の赤線が雨後のたけのこのようにできて貧困と歓楽の町に変貌した。米兵は金があるから日本の女を買って遊び、夜の町はにぎやかでした、全国有数の赤線の町でした、混血児が生まれていました。一方では暴力団も幅を利かせて事件、事故も沢山あり常習化したのです。広島原爆の悲劇は大きかったです、呉の悲劇は終戦後に沢山の米軍が進駐して呉の町の空気を悪くした。オーストラリア兵、スコットランド兵などもいたが大半米軍でした、彼らはモラルの低い連中で市民との争いで殺人などを起こしていた。犯人は日本に逮捕権が無いと米軍に引渡してました。兵隊は殺し屋ですからみんなレベルの低いやつばかりです、兵隊が犯罪を度々起こしていました。占領軍ゆえの特権だったのか。



※1945年8月15日、日本はポツダム宣言を受託して戦争が終った。ポツダム宣言にもとづいて日本軍国主義を解体し平和国家とするために連合軍が日本を占領することになった。連合軍といっても殆どはアメリカ軍でした。進駐軍と呼ばれた。

尊大なアメリカ軍の兵隊から脱脂粉乳を貰っている。
私はこれを良く飲んだ。

今日日米関係は良好に推移しています。日本がアメリカにぺこぺこしてアメリカに駐

留経費を沢山払っているからです。パートナーシップとおだてられているが財政赤字、貿易赤字は解消されず赤字たれ流しの米国を支えている。米国の赤字国債を相当買い支えて経済を支えています。もし米国の赤字国債を売ればドル暴落で日本経済が悪くなる。米国と離れられない関係であるが、米国人の派手さに付き合うのはほどほどが必要、米国は軍備縮小して経済の建て直しをすることが先決ではないか。国民1人1人が儲け以上に金をつかう、だめになったら戦争で稼ぐ。

米国は戦勝国としての味を忘れられない、数々の戦争に勝利して利権を手に入れている。第1次世界大戦で勝利、第2次世界大戦で勝利、1950年に朝鮮戦争が勃発して3年に及ぶ南北戦争ピョンヤンとソウルが占領しあう。この戦争で200万人の犠牲があった。

軍事力を強化してベトナム戦争に加担して失敗、イラクに大量兵器があるとしてフセイン政権を打倒したが無かった。アメリカの失敗を日本は認めない、アメリカ国民はブッシュ政策を認めて、戦争を否定してないのです、恐ろしい事です。

アメリカは女、子供が戦争の犠牲になっていない

米国は世界中に軍事力を行使して戦争をしてきた、沢山の兵隊を使い外国で戦争をして女、子供、老人を殺してきた。アメリカ本土での戦いは一度もしていない。戦争の犠牲者である国民すなわち米国の女・子供・老人は犠牲になっていない。都市が破壊され市民が犠牲になったら市民は二度と戦争をしてはいけないことを誓う。

アメリカは兵隊が戦死したら、国の補償があるが市民は戦争で死んでも国家は補償しないのです。犠牲者であります。たとえ生き残っても戦後の食料難をはじめとする生活苦は言いようのない苦難です。米国は国民がこの経験をしていない。アメリカ本土に他国が攻め入ってない。本土決戦をやってないので市民は死んでいない。女、子供は敵に殺されてない。他国を攻めて国民を殺す事は沢山やってきた。世界中に罪も無い女、子供、老人を殺してきました。米国には戦争で手柄をたて英雄視される人は沢山います。戦勝での戦果の味いばかりを経験した世界で一番の戦勝国です。アメリカ国民が本土決戦を経験していない、米国本土をたたいて沢山の犠牲者が出ていれば米国は変わったであろう。ドイツ、イタリア、ソ連、中国などは自国を戦場として多大の犠牲を経験しています。米国人は戦勝の味しか知らないのではないか。

私は最近、日本は北朝鮮が攻めてくると想定して軍事力強化しているが北朝鮮は戦争の怖さを国民が経験している。韓国、北朝鮮、中国も日本と戦争して多大の犠牲をはらっている。日本は満州を占領、南京大虐殺など沢山の市民を殺している。中国は戦争の怖さを体験した国なのです。戦争を支え、支持するのはアジア諸国の国民は戦争がワリに合わないことを経験しています。他国を攻めることはないでしょう。近隣諸国が責めてくる事は無い。

アメリカは戦力の保持で世界を支配しているが、力に屈服しない勢力が存在することを自覚しなくてはならない。力と力の対決でなく、力に対してテロの対決です。イスラム原理主義、アルカイダはテロを世界中に発生させ、テロの横行であり、テロリストは自分の命を犠牲にして無差別殺人を行う。アメリカは戦々恐々としてテロ対策に莫大な費用を投入している。米国は自国の恐怖を日本を同盟国として一層強固な国作りをし

ている。日本は軍事力を強化してアメリカに一層の加担はわが国を不幸の方向に向かわせるだけです。

日本は二度と戦争をしない事を国是としています。これは国民の意志であり強い願いです。

日本は原爆の洗礼を受け戦争の恐怖を知っている。日清戦争、日露戦争に勝利して、戦争に勝つことの味を占めたのです、日露戦争に勝利して、日韓併合をして1910年から35年間韓国支配した。戦勝の味を占めたが第二次世界大戦で米軍に徹底してたかれ、多くの犠牲者を出しました。いかに戦争の代償が大きいことを国民が知りました。二度と戦争をしてはいけません、犠牲者の呪いを忘れていけない。

何度も死線をさまよう

昭和23年に広小学校に入学、入学準備が出来ず1年遅れて入学、カバンは父がケンパスで縫ってくれた。新しいカバンを買って欲しかった。

呉市広小学校は中国地方で唯一のマンモス校です。一学年10学級で一クラス生徒数は50名以上、一学年500名、全校で3,000名の生徒を誇っていた。給食も県下で早く実施され、給食は米軍のヘリコプターが運動場に脱脂粉乳のドラム缶を投下していった。給食の脱脂粉乳（ミルク）を私は楽しみにして飲んでいました。中にはまずいと言って飲まない生徒もいましたので残りを貰って飲んでいました。

広工廠の住宅に住み、3歳の頃、縦2.5M、横1.0M 深さ3M 程度の防火用水に落ちておぼれ、近所の人に助けてもらい一命を取り留める。6月頃で近所の大人達が盛んに水をはかした、ボウフラを口から吐き出したそうです。赤痢になりました。

2年生夏休み、遊びは泳ぎに行くことでした。ある夏の朝、廣大川の泳ぎに行き浅瀬で泳いでいたら急に水かさが増し溺れた。上級生が助けてくれたが、定時に上流のダムの水門を開ける事を知らなかったのです。今も思います事は少し遅れていたら死んでいたのと思います、助けてくれた人は今も分かりません。

子供の頃は鉄屑拾いが盛んで10銭、20銭を稼いでおやつを買っていた。一番金になったのは銅線です。大人たちがあさっていた。3年生の頃です、おやつはありません。トマト、だいたい、グミなどは盗んで食べていました。6月頃でした、びわを獲って食べたら、それが原因で赤痢になり、広に有りました広大病院の隔離病棟に隔離され40度以上の高熱が4日以上続き、ベッドのそばで先生が話しているのが聞こえ、「お母さんこれ以上高熱が下がらないと頭がおかしくなる」と言っていたのを聞きました。赤痢ですからお見舞いはありません。母は心配で毎日来てくれました。小学校や町内を一斉消毒して大変な騒ぎであったそうです。

病院の端に隔離病棟があり、鉄格子の病室に1ヶ月以上の入院生活で1年生から3年生の時まで担任でした故平松アキエ先生が唯一お見舞いに来て下さった。面会謝絶なのに危険を犯して来てくださった先生は主人を戦争で亡くされ、戦争未亡人として教育熱心な方で頭の良くない私をよく指導してくれました。今思いますと私のために良くしてくださった。母の話ですとひいきをしない良い先生と父兄の間でも評判がよく学校から表彰された先生だそうです。小学校2年の平松先生の時に広駅に蒸気機関車の見学に行きました。私たちも初めて見る蒸気機関車に前の晩からそわそわしていました。石炭を

燃やすところなど見学して大変珍しかったです。もっとも張り切っておられたのは先生でした。印象に残っています。何事にも一生懸命でした。

平松先生は今は亡き人ですが私には大きな心の支えです。戦後の荒廃した社会でしたが、先生は一生懸命子供たちの教育にささげられた。素晴らしい先生でした。

私は30歳過ぎて先生宅を訪問しました、喜んでくださった。退職され1人暮らしで質素な生活の様子でした。

私は生まれた時から脱腸で小学校の上がる頃はズボンが膨れるほど大きくなり、冬になると冷えるので夜は苦しい思いを何晩もしました。風呂に入って温めればいいのですが家に風呂がありません。学校、近所で“大ぎんたま”と苛められ、悔しい思いを何年もしました。ハンデイがあれば馬鹿にされる風潮がありました。いじめによって耐えて勝つことを身に着けたのです。5年生になって手術をして治りました。戦後の荒廃した時代でいじめは止めましょうなど社会的な風潮はありません。強くなくてはいけなかったのです。

（編者注：その後の社会人としての戦後の活動は、別掲の「広島縫製労連専従34年のあゆみ」の項に続く）